

豊明希望チャペル礼拝

2022/7/3

I ペテロ 5 : 12~14

「低くされることを誇りとし」

I ペテロの手紙の手紙は、私がここに赴任した2年前の2020年から読み始めて、月に一度のペースで2年かかりまして、本日で、やっと終わりを迎えます。

イエス様の一番弟子のあのペテロが書いた手紙。イエス様を三度知らないと言ったあのペテロの手紙でありました。

この手紙は、パウロも死んで、当時の教会がだんだんとアジア、ヨーロッパにも知られるようになって、知られるようになった分、ローマから目を付けられるようになって、迫害の時代が始まった、ローマ皇帝ネロの時代に書かれた手紙で、この手紙の受信人達も、迫害で追われて、黒海の北側の今のウクラナイナあたりか、この手紙の宛先にはすでにいなかったかもしれない、そんな厳しい迫害の時代に書かれた手紙だということで、見てきました。

今日の箇所ですが、早速ですが、今日の箇所の前、前回の分、5 : 11 を見て下さい。5 : 11 「どうか、神の御支配が世々限りなくありますように。アーメン。」とありまして、これって、礼拝の後の祝祷なのです。

もっともこれは、手紙ですから、手紙で言えば、PS、すなわち追伸の部分にあたります。ここに、2人の人の名前が出てくるのです。それは、ペテロに仕える献身者の名前でした。一人は、シルワノ(シラス)、もうひとりマルコであります。この二人は、聖書でもたびたび触れられている人ですので、この際、この二人について、黙想して、それをもって、I ペテロを閉じられたらと思っています。

まずシルワノです。

(1) シルワノについて。

使徒の働きでは、シラスという名前です。シルワノは、ヘブル語(正確には、そのヘブル語のラテン語読み)で、シラスはそのギリシャ語の読み方だということです。二つの読み方をするとということに、彼の役割が象徴的に語られていると思います。

というのは、シルワノ(シラス)は、色々な見方がありますが、おそらくローマ市民で、ラテン語に加えて、さらにギリシャが堪能な人であったということです。

話しがややこしくなるかも知れませんが、この後に出てくる、マルコとこのシルワノと、パウロとその同労者バルナバの4人がエルサレムから異邦人伝道に遣わされたのです。遣わされたのですが、パウロは、マルコがその伝道旅行で戦線離脱して逃げちゃったものですから、マルコはダメだといって、このシルワノと伝道旅行をするのですが、それをきっかけに、バルナバともパウロは袂をわかってしまうということがありました。(パウロ&シルワノ vs バルナバ&マルコ)

パウロにとってシルワノは、とても重要な人で、パウロが、ギリシャのテサロニケにおいて、迫害を受け（ユダヤ人の迫害）、パウロが町の外に連れ出されてしまうというような事がありました。その時、シルワノは、町に踏みとどまります。（使徒17：14）踏みとどまることが出来たのは、彼がローマ人でギリシャ語も達者で、テサロニケの人々から、彼が尊敬を受けていたからだという指摘があります。

話しが膨らみすぎてしまうかも知れませんが、以前の教会で、山梨県の大月市に開拓伝道をしていました。駅前に良い土地が見つかったのです。しかし、教会の開拓の難しさの一つに、近隣との関係があります。大月の会堂にいいよ十字架をかかげるといふに際して、近隣に挨拶に伺いました。教会員に小学校の校長がいました。今でも、彼のおかげだと思ひ、また神の摂理だと思ひているのですが、ちょうどその日、彼は、僻地の学校の閉校にあたって、最後の卒業式に、その学校を担当していた代表の校長として、NHKの番組で、卒業証書を読む校長として紹介されたその日の午後だったのです。お伺ひして、私の紹介をし、彼の紹介をすると、教会のまさに隣となる、その御主人が、驚いて言われました。「あなた！今朝、TVに出ていましたね！」「はい。」その人が、この教会の責任者として来る・・・（いいえ、正確には私なのですが・・・）、彼の顔が輝いていたことを忘れることは出来ません。

パウロがテサロニケから追い出されたが、シルワノがそこに残って、信頼を得て、パウロの出来なかつた分を果したのです。

ペテロにとつても、そういうパウロとの伝道の経験のあるシルワノで、こういう語学力もあり、ローマにも土地勘のある彼は、非常に役に立つたこととおもいます。

実は、この手紙、ギリシャで書かれているわけですが、ペテロの口述を、シルワノがギリシャ語で筆記したのです。

（それで、この11節のアーメンの後の、12～14節は、ペテロが、シルワノからペンをとつて、彼が書き添えたというわけなのです。）

シルワノについては、他にも情報が多く、紹介したいこともあるのですが、そのくらいにしておきましょう。

私が何を強調したいかと言うことですが、私たちが、あるいは、あまり注目しない人間の中に、実は、神さまによって、キーパーソン、要の人間として、立てられていたクリスチャンたちがいたんだということです。パウロやペテロに注目するけれど、実は、その働きは、こうしたキーパーソンと言へるような人々によって担われていたと言うことです。シルワノなくしてパウロなくペテロもその役割を果たすことが出来なかつたと言うことです。

さて、もう一人は、マルコです。

（2）マルコについて

マルコについては、13節をまず、読んでみましょう。

5:13「あなたがたとともに選ばれたバビロンの教会と、私の子マルコが、あな

たがたによろしくと言っています。」

ちなみに、バビロンとは、栄華を極め、イスラエルを亡ぼしたあのバビロンです。ペテロは、バビロンで、ローマを指しています。ペテロは、マルコを指して、こう言います。「私の子マルコ」と。

シルワノとは、違った意味で、ペテロにとっては、マルコも、大きな助け手となりました。「子」というのは、ペテロが洗礼を導き洗礼を受けたのかもしれませんが。彼は、あのマルコの福音書を書いたマルコと思われま

先にも話したように、彼は、パウロが、異邦人伝道に出るにあたって、おそらく怖じ気づいたようです。シルワノは、外国出身ですが、マルコは、きついのユダヤ生まれのユダヤ人ですから、異邦人に関わり、異邦人に伝道するなど、ものすごい心の負担があったでしょう。エルサレムの母の下に帰ってしまったのです。母の名前はマリヤ。彼の生まれ育った家はマリヤの家と言われ、若いときに父親を失っていると思われま

す。その家はエルサレムの市内にあって、大きな家で、実は、イエス様の最後の晩餐のときに提供された家と言われ、ペンテコステの日にも、使徒達が集まっていたのが、この「マリヤの家」とあり、そこには、女中がいたことがわかるのです。マルコについては、マルコの福音書の著者とすれば、もっとも情報の多い人物の一人でしょう。マルコ14章をみると、マルコは、最後の晩餐の後（マルコ14：51～）、イエス様についていくのですが・・・彼は、こう語ります。イエス様はローマ兵に連れて行かれた。すると、その時、弟子達がイエス様を見捨てて逃げ去った。その時、ある青年（マルコ自身の事ですが）が、素肌に亜麻布を一枚まとったままで（それでも）ついていったのだが、人々が彼を捕まえようとしたので、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、裸になって逃げていった。」と。

何度か言及したように、その後も逃げたわけで、パウロの彼に対する評価は「マルコはダメだ」そういう判断であったかも知れません。それは、マルコ自身も、後から振り返り、良く理解していた自分の弱さだったのかも知れません。しかし、今、パウロの後を継いだ、ペテロの下を離れないで、アンテオケ伝道のパウロが出たあの時代よりも、もっとも危険な時代に、ペテロの最大の助け手、慰め手として、ペテロのもとに彼がいたということがわかるということです。

すなわち、5:13「・・・また私の子マルコもよろしくと言っています。」という評価に変わっていたということ

です。いつどのように彼が、成長しえたのかは、聖書から知ることは出来ませんが、確実に彼は成長したのだと思います。パウロから離れたその出来事があったから、およそ10年後、彼の名前がパウロの手紙に登場します。それは、パウロの獄中からの手紙でした（コロサイ書、ピレモン書、Ⅱテモテ）。パウロの評価もその頃は違っていました。若き伝道者テモテにパウロは、マルコを評してこう書き送ったのです。「彼（マルコ）は、私の務めのために役に立つ。」（Ⅱテモテ4：11）と。たしかに彼は成長したのだと思います。

さて、シルワノとマルコについて見てきました。

5:14「愛の口づけをもって互いにあいさつを交わしなさい。キリストにあるあなたがたすべての者に、平安がありますように。」

最初に、そしてずっと、言ってきましたように、これは、迫害の最中に書かれた、きびしいきびしい手紙です。

加藤常昭という、前：鎌倉雪の下教会牧師がいます。彼は、戦争が始まる昭和17年。彼が中学生の時、イエス様を信じて洗礼を受けます。そんな当時の、彼の通っていた代々木教会の牧師とその時代の教会について語ります。会堂には、「宮城（皇居）方向」という張り紙が張られ、教会が献金をして軍用機を国に寄付しようという運動がなされ、特高警察が時々、説教の内容をチェックしにきていました。牧師はイザヤ書からのメッセージを始めた。特高警察には何がなにやらちんぷんかんぷんであったろう。しかしそのイザヤ書は、王に対する直言であって、言わば預言者の痛烈な国家批判の書です。加藤少年は、こそで、牧師が、神こそ王だといい、「神の審判を待つ」「過る政治と預言者」などとその意味がわかったら即連れて行かれるような言葉を聞くのです。しかし教会員はだんだん少なくなり、恐らく100人以上のような教会が、20人くらいまで少なくなります。こんな事がありました。彼は、礼拝後、牧師と、若者達が話すのを部屋の片隅で聞いていました。それは、まもなく学業を中断して徴兵に応じなければならない大学生達が、熊谷牧師に、我々が、今銃を取って戦争に出る。私たちに人殺しが出来るのかと、問いつめたのです。牧師の妻のアメリカ婦人が同席しているときでした。また特高の監視の下、問う青年達の前で、牧師が一言も言葉を発することがなかった様子を加藤師は見っていました。そして、こう語るのです。熊谷牧師が、青年達に詰め寄られたとき、何か良い解決があるわけではなく、結局何も答えられないし、祈る以外にないということではなかったかと。あるいは、しかし祈る事でこそ解決が与えられる。という事であったのではなかったかと。

今、平和の問題が、世界に突きつけられています。先週、礼拝で、平和、シャロームの言葉に触れました。

ここの「平安がありますように」は、ヘブル語の平和、シャローム（平安）です。

平安があるように。たしかに胸の引き裂かれるような重いシャロームです。

事態は悪くなっているのです。迫害は迫っている。今こそ、互いの愛し合う愛、兄弟姉妹の支え合いが大切です。しかし、何より言いたいのは、私たちが愛し、守って下さるキリストにあって、私たちはシャロームだ、平安だというメッセージなのです。

ある牧師は言われました。「この手紙を書きながら、ペテロは祈る。祈りながら手紙を結ぶ。おそらくペテロは、この手紙を書き終えた後も、祈り続けたに違いない。」と。

私たちの今週の歩み。シルワノが、マルコが、命がけで最後までペテロに仕え、キリストに仕えたように、このシャローム、平和を与えて下さる神に、キリストに仕える者として、この世に遣わされていきたいのです。祈ります。